

## 講壇点滴

## 人間を照らす光

ヨハネによる福音書

第一章一〜一八節

牧師 姜 倅 米

神の「言」が、私たちを本当に生かす命の源であることをこの福音書は語ります。その神の「言」、神の語りかけが、私たちを生かすことと生かすことを別の仕方です。四節後半から五節にかけての「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかつた」です。

「言」の内に命がある、あるいは「言」によって成ったものは命を与えられ、生かされるといふことが、この「言」は人間を照らす光であるといふ替えられています。

光は、神が天地創造のみ業において最初にお造りになったものであり、この世界が存在し、人間が生きたために神が与えてくださった第一のものです。光が輝くことから始まって、神の愛によって秩序づけられた世界が、私たちが生きることのできる世界が築かれていったのです。この光が「人間を照らす光」と言われていることは大事です。

神が光を創造してくださったのは、何よりも人間を照らすためです。光は私たち人間に對する神の愛の現れなのです。その光は、天地創造の時に輝いただけではありません。五節に「光は暗闇の中で輝いている」とあります。これは現在のことを語っている文章です。光は今、暗闇の中で輝いているのです。神の

愛が今、私たちに注がれ、私たちを生かしているのです。そして、「暗闇」もまた現在のことであることを示しています。光が創造されたから、闇はないわけではありません。

私たちの人生に、そしてこの世界に、今、現実として、暗闇があるのです。その暗闇をもたらししているのは私たちの罪です。私たちが、「言」によって、愛による語りかけによってこの世界を造り、私たちに命を与えてくださった神を神として敬い、礼拝し、その神と共に生きようとせず、神から目を背け、神の言に聞き従うのでなく、自分の思いや考えを第一として生きている、それが罪です。その罪によって私たちは神の光を見失い、暗闇の中を生きているのです。そのように私たちが作り出した暗闇の中に、神が愛の光を輝かせてくださっているのです。

五節の後半には、「暗闇は光を理解しなかつた」とあります。ここは口語訳聖書では、「やみはこれに勝たなかつた」となっています。「理解する」、これは「悟る」とも訳せるし、「打ち勝つ」、「勝利する」とも訳せる言葉です。ここには、光と暗闇との戦いが見つめられています。今、この世界と私たちの人生に暗闇の現実がある。しかし、そこに神の愛による光が輝いて、暗闇を打ち払い、私たちに命を与えてくださるのです。光と暗闇の戦いは今繰り広げられています。しかし、この戦いにおいて勝利するのは、暗闇ではなくて光です。光が輝く時、闇はその光をかき消すことはできないのです。

人間を照らす光が、暗闇の中に輝いている、それは、この世界に起った具体的な現実です。主イエス・キリストが人間となってこの世に

来てくださり、この地上を生きてくださり、十字架の死と復活による救いを実現してくださったことによってこのことは現実となったのです。この福音書の三章一九〜二二節にそのことが語られています。「光が世に來たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっていく。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に來る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかにするために。」

光はすでに世に來ました。しかし、人々は、その光を受け入れなかつたのです。それは、まことの神が人間となってこの世に來てくださった、十字架の死を遂げてくださった主イエス・キリストのことです。主イエスは「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と八章一二節で語られました。

「人間を照らす光」とは、主イエス・キリストです。「光は暗闇の中に輝いている」というのは、私たちの罪によるこの世の暗闇の中に、主イエス・キリストが來てくださり、私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んでくださったことによって罪を赦してくださった、復活によって、私たちにも復活と永遠の命の約束を与えてくださったということなのです。その主イエスが、礼拝において私たちと出会い、語りかけ、交わりを持ってくださるのです。この世の現実におけるどのような暗闇も、この主イエスの恵みの光に打ち勝つことはできないのです。

(二月二日 アドベント第三主日礼拝)